

Kanagawa Library Association

巻頭言 これからの神奈川県図書館協会の活動	1
平成30年度神奈川県図書館協会総会開催報告	2
表彰受賞者	5
事業計画	5
予算・研修計画	6
役員名簿・委員会名簿	6
研修レポート「新たな視聴覚サービスについて」	7
連載：わたしのイチオシ「YNU英語多読マラソンシステム」	8

これからの神奈川県図書館協会の活動

神奈川県図書館協会長 神奈川県立図書館長
此田 雅之

この4月から神奈川県図書館協会長に就任しました神奈川県立図書館長の此田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

県図書館協会は昭和3年の設立以来、今日まで図書館に関する調査研究、図書館活動の普及、職員の研修等に取り組んできました。

現在、会員図書館は公共・大学・専門図書館合わせて133館、蔵書数は約3600万冊(平成29年4月時点)に達し、多くの利用者に図書館サービスを提供し、文化の進展に寄与しています。

近年、図書館を取り巻く社会状況は超高齢社会の進展や社会の高度情報化、グローバル化、個人のライフスタイルの多様化など、大きく変化しています。

高度情報社会では、個人が主体的に判断し情報の収集・取捨選択する能力を身につけることが必要です。

図書館には、インターネット環境の整備や資料のデジタル化などICTを活用し、多様な情報提供に努め、個人の自己判断を支援することが求められています。

また、様々な情報、資料を持つ図書館は、地域の情報拠点として、地域課題の解決に寄与する情報を積極的に提供することが期待されています。

このような利用者支援や社会の要請に応えるサービスを提供するには、図書館職員の資質向上も必要です。

コミュニケーション能力、専門的なレファレンスに的確に対応する能力、情報活用能力及び地域課題を把握・分析する能力を持つ人材が求められています。

高度情報化への対応、地域課題解決の寄与、人材育成の取組みに当たっては、県内図書館の連携が必要のため、県図書館協会の役割が大きくなっていきます。

引き続き、調査研究、ホームページや会報等による最新情報の提供、先進事例の視察、人材育成のための研修等を行い、図書館サービスの向上と職員の資質向上に取り組んでまいります。

県図書館協会は今年、設立90周年を迎えました。今秋には記念事業を開催します。この機会に、これまでの活動を振り返り、直面する諸課題の解決と、将来の図書館活動を見据えた新たな活動に取り組むたいと考えています。

また、図書館をより活用していただくため、広報活動にも積極的に取り組むたいと考えています。皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

平成 30 年度 神奈川県図書館協会総会開催報告

平成 30 年度神奈川県図書館協会総会が、4 月 26 日（木）に神奈川県立図書館新館 4 階セミナールームにて開催されました。

はじめに、小林事務局長から人事異動等により会長及び一部の役員の交代について報告がありました。

此田雅之会長（県立図書館館長）より、「今年は設立 90 周年の記念すべき年であり、神奈川県内の図書館の振興をさらに図り、県民の様々なニーズに応じて、図書館がますます活性化するよう努めたい。」との挨拶がありました。

続いて、審議事項に入り、平成 29 年度事業実施結果及び決算について、平成 30 年度事業計画（案）及び予算（案）について、審議が行われました。審議事項については、原案通り承認されました。

表彰式では、会員施設に 20 年以上勤務した永年勤続職員 11 名、神奈川県図書館協会及び県内図書館事業に尽力し、功績のあった功労者 1 名 1 団体の表彰がありました。



講演会は、有限会社 BACH（バッハ）の幅允孝氏をお招きし、「ブックディレクター幅允孝の仕事」と題してお話していただきました。

【講演会概要】

ぼくが有限会社 BACH を立ち上げたのは 14 年前、それ以来ブックディレクターという肩書きで仕事をしてきた。ブックディレクターという職名の由来は、「情熱大陸」という番組で取り上げられた際に職業名をつけるようにと言われ、本にまつわる色々なことをしているからブックディレクターとした。企業図書館や病院のライブラリーを作り、そのユーザーにインタビューをしながら本を選んでいくことを仕事としている。今日は、どうやって選書をしているのか、コーナーを作る時にどんなことを考えているのかを紹介することで、皆さんのお役に立てればいいと思う。

2002 年まで青山ブックセンター六本木店に勤

めており、2000 年に Amazon の日本進出を目の当たりにした。当初小売りの現場ではあまり重要視してなかったが、インターネット回線の拡大につれて次第に売り上げが落ちていった。一番ストレスを感じたのは、来店客数の減少だった。本が人目に晒されることが少なくなり、場所としての魅力やあたたかさがなくなっていくのはとてもまずいと思った。そのような時に、雑誌『POPEYE』や『BRUTUS』の創刊に携わった石川次郎さんに声をかけていただき、次郎さんの事務所、ジェイ・アイに入ることになった。そこで、TSUTAYA TOKYO ROPPONGI 店の選書担当とディレクション業を任された。この店舗が成功したことで、本屋さんや図書館を作りたいというお話を頂くようになった。企業図書館の依頼が多い。例えば横浜のとある自動車会社のライブラリーでは、かつて紙の本を減らす方針だったが、現在はもう一度集め直している。車のデザインにおいて、若いデザイナーは素材を素早くコラージュするのはとても上手いが、独自性のないデザインが増えてきた。そんな中で一人、彼でなくては書けないような線を描くデザイナーがいた。これからのデザインというものを考えた時に、どうしてもこれが好きだという気持ちで書く線が必要になるのではないかな。そういった意味で、この会社で作る図書館は、たくさん読んでもらうというよりは一冊が深く刺さってくるものを探そうと考えた。紙の本はデジタルと比べ、書き直しが出来ないのが特長で、だからこそ推敲がよくされている。精度も強度も高い。紙の本だからこそ、深く誰かの心臓に刺さるような情報が提供できるのではないだろうか。

自分の初期衝動は、好きな本を共有したいと願うことだ。自分が読んで面白い本を伝えたいと思うことは、本を選ぶ上でとても大事だ。しかし、伝えたい本がなかなか伝わらない状況であると感じている。本の販売部数は下がってきているのに反比例して発行点数は増え、一日で二百数十冊出版されている本の全てをキャッチアップすることはできない。本に携わる人間ですら把握が出来ない状況では、本が好き、興味があるという人が何を手にとっていいのか分からないのは当然だ。この氾濫を交通整理して、人と本にもう一度良い出会いをもたらすことができないだろうか。人が本屋さんに来ないのであれば、人がいる場所に本を持っていくことはできないだろうか。

有限会社 BACH では、異業種の中に混ぜ合わせたライブラリーを作ることが多い。本がファーストプライオリティーではない人にも気持ち良く本にアクセスしてもらいたいという気持ちがある。先ほど好きな本を共有したいという話をしたが、これはなかなか難しく、良かれと思って熱く語っても、相手にとってはお節介にしかならないことがある。お節介にならないためには、相手の話を聞き、対話形式で選書を進めることが重要だ。届けたい相手が両手を伸ばして届く範囲内に本を配置する。例えば、子どもに児童文学を読んでもらうイベントの時に、スティーブソンソンの『宝島』を持って行った。本の内容を話しても、子ども達はぼかんとしている。そこで同じ海洋冒険譚として『ONE PIECE』の話を出すと、こちらは読んでいる子どもがたくさんいる。つまり、子どもたちが両手を伸ばした範囲の中に『宝島』は入っていないが、『ONE PIECE』は入っている。なので、この二つを結びつけるもの、結節点を探してあげる。どちらも史実の海賊史に基づいているため、登場人物が似ていることを紹介したり、作者の尾田栄一郎氏が影響を受けた本に『宝島』を挙げていることを伝えると、子ども達も興味を持つようになってくる。相手の興味の範囲を聞くことにより、薦めたいものとの結び目を作れるという意味で、インタビューは重要だ。図書館の現場に鑑みると、一人一人に話を聞くのは難しいと思うが、もっとユーザーとの対話を大事にして、まず一人の読者を見つけることが重要ではないか。今世の中のエンタテインメントは、みんなで動画を観ようなど、共有することがベースだ。これだけシェアネス、共有性がアミューズメントのベースになっている今、一人にならざるをえない、一人で向き合うことになる本はすごい特性を持っていると言える。世の中のシェア化が進めば進むほど、読書行為の孤独さがより際立ってくる。そういう意味を考えた時に、一人という最小単位から物事を考えることが重要なのではないか。

本棚の編集について、ぼくたちは、NDC よりも自分たちの独自編集でライブラリーを作ることが多い。だいたいこのジャンルの本棚とはこういったものだろうというような既視感を超えていかなければならない。企画展示を考える時は、とにかく落差について考えている。例えば愛知県のトヨタミュージアムにある CARS & BOOKS では、ロールスロイスが出来るまでの写真集の横に、『ちびまる子ちゃん わたしの好きな歌』を置いた。一見全く関係のない本だが、実は作中にロールスロイスでドライブをするシーンがある。要は、全く関係の

なさそうなものになんらかの連なりを発見すると、人は面白い、読んで見ようかなと思ったりする。組み合わせる、編集することによって好奇心の誘発ができ、人の足を止まらせる引力が作れる。もちろんただ置くだけではなく付箋などで意図を示し、サインやメッセージを含めて、ユーザーに楽しんでもらう。どういう意図でこれらの本が選ばれて、どう置かれているのかがぱっとわかるようにする。それで初めて企画棚というものも完成するのではないか。

JAPAN HOUSE (Sao Paulo) を紹介する。ここの本棚は縦板がないのが特徴で、壁一面すべて横に連なった棚になっている。横スクロールのような形状であることを意識して、「気が付いたら横移動しているような本棚」を目指して作った。実際に行って面白かったのは、60年代の美術書などの古書に人気があったこと。聞いてみると、ワンクリックでやってこないものに価値があるということだった。なんでもワンクリックで手元に届くような世の中になればなるほどそうではないものの価値が上がっていく。例えば公共図書館の閉架で人目に触れない場所にあるような本は、逆に今の人には価値あるものとして響くところがあるのではないか。図書館に既にあるものを上手く抽出してしっかり見えるような場所に置く、ということによってまだまだ響く棚作りは出来るのではないだろうか。



高木学園女子高等学校では、図書館を刷新したいということで相談を受けた。行ってみると、図書館は旧校舎にあり、普段授業をしているのは新校舎。そこで、移動型のワゴンで図書館の本を新校舎に持ってきて、1ヶ月ごとに内容を変えた。ワゴンは可愛くかざりつけ、図書委員のエプロンをかawaiiいものにした。本を扱っている自分が、ちょっと良いものだと思えるようなマインドシフトをしていくことはとても大事だ。インタビューでは、図書委員や本をよく借りる子から本が嫌いな子まで、読書状況が異なる生徒を抽出した。そうすると、本をほとんど読まない女子高生でも、アニメやゲームで扱っている題材への興味はすごい。テキストを読んで物語を自分に注入したいという欲求は今も昔も変わらず存在している

ことにまず安心し、ゲームというメディアの力をもってすればテキストを読み進めるという態勢もあったと思った時点で、自分なりの結び目を見つけられた。「アニメの原作とその周辺」という棚を作り、アニメ、ゲームから派生させるような形で、ミステリや偉人の評伝などを並べると、とても興味を持ってくれた。いきなりこれを読めと言っても興味を持ってくれないが、興味のあるものからの道筋を明文化することで、本が届くようになる。僕はどうしても本を読ませようとしてしまうが、本という媒体でなくとも、好きなお菓子や食べ物と関係のあるものであれば手に取ってくれるし、それが結果として本だったというような状況が一番重要なのではないか。本を読ませることを目的化するのではなく、本という道具を使ってもらおう。そういう考え方でやっていくと良いのではないか。

神戸アイセンターは眼科の総合病院で、とても先進的な取り組みをしている。ここでは、全盲の方と弱視の方とで選ぶべき本が全く違っていた。全盲の方は、音声図書の発達により点字が出来る若い方が減ってきているので、誰もが知っている本の点字作品を置いて点字に触れあってもらおう。また、言葉というものをもう一度考え直す機会をつくるための本を集めた。そのきっかけに『でんしゃはうたう』という絵本がある。この、電車が発して次の駅へ到着するだけの物語を、ぼくら健常者はガタンゴトンという擬音で終わらせてしまいかもしれないが、全盲の方は音に対してはとても鋭敏で、聞こえてくる音を一個一個細かく分類して言葉に落とし込むことができる。健常者よりも（おそらく）より鋭敏な聴覚を使って言葉について考えてもらおうと思った。また、ワークショップで画集を全盲の方にお見せするという試みをした。例えばシャガールの絵について、全盲の方に言葉で説明する。インタビューの時に、実際に見せることが出来ない以上、これは残酷なのではないかと聞いてみたのだが、患者の方に「私の頭のなかで描けているシャガールの絵が実際の絵より良いか悪いかは誰にもわかりませんよ」と言われて、あえて画集をいれてみた。弱視の方には、コントラストが強いカラーの写真集がいいとインタビューの中でわかった。一番人気だったのが篠山紀信さんの『アイドル 1970 - 2000』という写真集。弱視の方へは、何が見えるかというより何が見たいかを考えることが重要だった。磁場に従って、インタビューしたこの人はこれが好きだろうなと考えながら選ぶ。生の声を拾い上げて、一人の読者に向けて選ぶというふうに行っている。

兵庫県豊岡市城崎温泉で行っているプロジェクトを紹介する。2013年が志賀直哉来湯100年ということでぼくが呼ばれた。現場に行ってみると、確かに石碑はたくさんあるのだが、残念ながら過去自慢にしかなくなっているということだった。今城崎に来ている人たちに通じるように作品を差し出そうと思い、第1弾として出版されたのが『注釈・城の崎にて』だ。志賀直哉の『城の崎にて』はとても短いのだが、そのオリジナルに加えて、当時の志賀の様子や、この短編が後の作品にどう繋がったか注釈をつけ、100年以上前の作品である『城の崎にて』にアクセスしてもらおうようにした。また、現在の小説家に城崎に逗留してもらい、作品を書いてもらおうと提案した。はじめに依頼したのは万城目学さんで、書いて頂いたのが『城崎裁判』という短編だった。温泉で読んでもらうために、表紙をタオル地に、紙を防水にして、お風呂の中で読めるような本を作ったところ、2年半で1万部売れた。その後、湊かなえさんに『城崎へかえる』という作品を書き下ろしてもらった。この『城崎へかえる』は蟹をひたすら食べる話なので、まるで蟹の脚のような見た目と手触りの装丁にした。これも1万部を突破している。これらの本は、旅館組合の若旦那衆とバハで立ち上げたNPO法人「本と温泉」でネット通販なし、買うためには城崎に来るしかないという方策を打ち、販売を続けている。日本全国色々な場所にゆかりの作家やゆかりの本があるが、昔書かれたものを展示するだけだと過去自慢になってしまう。それをどのようにアップデートしていくかが大事だと思う。また、城崎文芸館もリニューアルした。お金がないので、展示は手づくりで工夫した。図書館の展示はどうしても平面的になりがちだが、それを立体的にすることで良い意味での違和感が生まれると思う。本の中のアフォーリズムの抽出はすごく効果的で、そうやって抽出できるものを立体化していく。ただ本を展示するという事に止まるのではなく、それをどうやって目の前を通り過ぎる人に投げかけるのかと新しい方策を考えていくのはすごく重要なのではないかと思う。図書館の在り方として、アーカイブスが重要である一方で、目の前を素早く通りすぎてしまう人へ投げかけをすることも重要だ。この両輪を走らせなければ、図書館は人を引き付ける魅力を発しづらくなっていく気がする。

ぼくらはプロジェクトをやる時に、身体性を重要視している。東京ミッドタウンでパークライブラリーというイベントをやっていた。ピクニックバスケットに3冊の本と敷物を入れて貸し出すという屋外図書館で、敷物が無料だからと借りてい

く人が多かった。本を敷物の重しにしているだけの人でも、日のあたる庭でパラパラと本をめくってくれる。ふだん本を全く開かない人に、どうやって本を届けるのかという時に、身体が気持ちいいシチュエーションを整えてあげると良いのではないか。身体の気持ち良さによって精神的な余白も生まれてきて、何かに手を伸ばすということも起きる。読む環境としての図書館をどう仕上げていくのか、環境づくりも考えなくてはいけないのではないか。どうしても格好良さや書架の見栄えが語られがちだが、そこに来た一人の人が気持ちよく本を読むにはどうしたらいいかを考える。それもライブラリアンの重要な仕事なのではないかと思う。



平成 30 年度 表彰受賞者

★功労者 1名1団体 ()内は推薦施設名

○賀谷恭子氏 (横浜市中)

1995年、本牧小学校へのブックリスト作成等の活動をきっかけに、これまで22年にわたり、中区はもとより市内各所で本を通じた「子ども」「高齢者」を地域に結びつけていく活動の中心となって読書振興の活動を行っている。

○ハイジの会 (川崎市立宮前)

「おはなし会は子どもと本をつなぐものであり、昔話や児童文学を楽しむ事で生きる力を育んでほしい」という理念のもと、平成8年の発足以来、長年にわたり、素話や絵本の読み聞かせを通して子どもたちを楽しませる活動を行っている。

★永年勤続職員 11名

白石智彦 (県立)、小野桂 (県立川崎)、渡辺加奈子、小口恵利子 (横浜市神奈川)、渡辺準 (川崎市立幸)、饗庭寛子 (藤沢市総合市民)、渋谷宇一郎 (藤沢市南市民) 横堀憲児 (厚木市立中央)、立石文恵 (関東学院大学)、浅利典江、岩崎ゆかり (東海大学)

平成 30 年度 事業計画

1 図書館に関する調査研究

- (1) 地域資料等の調査研究
- (2) 大学図書館の調査研究

2 図書館活動の普及

○図書館活動についてPRを行う。

○協会ホームページのメンテナンス作業を実施する。

3 読書推進運動

○子ども読書活動推進フォーラムを県立図書館と共催する。

4 図書館職員の研修

○図書館員の資質の向上をはかるため、次の研修を充実させる。

(1) 見学 (国会図書館、公共図書館、大学図書館)

(2) 講座 (大学図書館研修、高齢者サービス、製本・修繕、YAサービス、障害者サービス、窓口サービス、図書館システム、図書館利用の推進、事例紹介 等)

(3) 児童担当者向け (県の子ども読書活動推進フォーラム、児童サービス、学校等他機関との連携、おはなし会 等)

(4) 視聴覚 (著作権、視聴覚資料の構造・取り扱いについて 等)

(5) 図書館総合展フォーラム

(6) その他

5 機関紙、その他の印刷物の刊行

○「神奈川県図書館協会報」第263号～第266号を発行する。

○「神奈川の図書館2018」を刊行する。

6 図書館相互の連絡協同

○神奈川県図書館協会の運営その他に関して次の会議を行う。

(1) 総会 平成30年4月26日

(2) 理事会

(3) その他

○永年勤続職員及び県内図書館の功労者に対して表彰を行う。

※ 総会開催と同時に実施。

○大学図書館間における相互協力の推進を図るため次の事業を行う。

(1) 共通閲覧証による相互利用

7 協会創立90周年記念事業

○式典、記念講演会、記念展示を実施する。

○図書館所蔵の地域資料のデジタル化を行う。

○人材育成基金の検討を行う。

平成 30 年度 予算

<一般会計>

収入 (円)

分担金等収入	各館分担金	1,509,000
	個人会員分担金	51,000
	日図協団体活動費	128,445
繰越金	前年度繰越金	794,000
雑収入	雑収入	20
合計		2,482,465

支出 (円)

事務費	事務局費	95,000
事業費		
会議費	会議費	61,000
調査研究費	調査研究費	122,400
	館員等研究費	515,000
広報活動費	会報等発行費	540,000
	図書館総合展費	269,000
表彰費	表彰費	86,000
記念事業特別 会計への繰り 出し		0
予備費		794,065
合計		2,482,465

平成 30 年度 研修委員会 研修計画 (平成 30 年 6 月 12 日現在)

	開催日	研修内容
施設 見学	6月26日(火)	県立川崎図書館
	7月20日(金)	国立国会図書館
	9~10月	大学図書館 (見学先未定)
講演	1月18日(金)	国立映画アーカイブ本館
	9~10月	大学図書館(内容未定)
	12月8日(土)	県子ども読書活動推進フ ォーラム(内容未定)
	1~2月	LLブックによる利用案内 (仮)
	未定	高校におけるビブリオバ トル(仮)
	未定	異文化に対応した窓口 サービス(仮)
総合展	11月1日(木)	協会 90 周年式典と記念 講演(題未定)

平成 30 年度 役員名簿

(平成 30 年 4 月 26 日)

会長	此田 雅之 (県立図書館)
副会長	山口 隆史 (横浜市中央図書館)
	新岡 智 (関東学院大学図書館)
理事	島田 圭 (県立図書館)
	堀端 保聖 (県立川崎図書館)
	沖間 俊明 (横浜市中央図書館)
	小島 久和 (川崎市立中原図書館)
	山口 正樹 (横須賀市立中央図書館)
	安田 清高 (逗子市立図書館)
	高橋 聡 (海老名市立中央図書館)
	来嶋 芙実 (大和市立図書館)
	湯澤 さいみ (茅ヶ崎市立図書館)
	嶋田 章 (寒川総合図書館)
	古矢 智子 (小田原市立図書館 小田原市立かもめ図書館)
	志田 基与師 (横浜国立大学 附属図書館)
	新中 新二 (神奈川大学図書館)
	奥村 裕司 (相模女子大学附属図書館)
	元木 章博 (鶴見大学図書館)
	中嶋 卓雄 (東海大学付属図書館)
	辻原 登 (神奈川近代文学館)
監事	田中 俊穂 (総合教育センター教育 図書室)
	堀江 信夫 (県立公文書館)
事務局長	小林 利幸 (県立図書館)

平成 30 年度 委員会名簿 (◎は委員長)

<企画委員会>

- ◎沖間俊明 (横浜市中央)
- 海老沼隆 (横須賀市立)
- 来嶋芙実 (大和市立)
- 小島久和 (川崎市立中原)
- 堀江美由紀 (神奈川大学)
- 宇佐美恒城 (神奈川近代文学館)
- 鈴木めぐみ (県立)
- 稲葉伊岐子 (横浜市中央)
- 松浦晴美 (関東学院大学)

<広報委員会>

- ◎海老沼隆 (横須賀市立)
- 原田暁 (神奈川県立)
- 坪根史織 (横浜市中央)
- 菅井紀子 (県立川崎)
- 吉井聡子 (川崎市立川崎)
- 伊東美乃里 (相模原市立相模大野)

中村春菜（平塚市中央）
岡崎富美江（東海大学）
中山昌也（横浜国立大学）
宇佐美恒城（神奈川近代文学館）

<地域資料委員会>

◎來嶋芙実（大和市立）
津田志保（神奈川県立）
阿久津望（横浜市中央）
生田春菜（県立川崎）
丹羽朋子（二宮町）
神山幸平（湯河原町）
近藤聡子（鶴見大学）
佐々木友香（公文書館）

<研修委員会>

◎小島久和（川崎市立中原）
白石智彦（県立）
真栄田久恵（横浜市中央）
舟田彰（川崎市立宮前）

水野優子（鎌倉市中央）
萩原郁美（厚木市立中央）
篠田賢治（座間市立）
三瀬耕平（海老名市立有馬）
今村佳奈（藤沢市総合市民）
飯樋美鳩（茅ヶ崎市立）
吉岡伸恵（秦野市立）
星崎貴之（小田原市立）
坪井航（横浜市立大学）
三好由美（相模女子大学）
布川帆波（県ライトセンター）

<大学図書館協力委員会>

◎堀江美由紀（神奈川大学）
豊田裕昭（横浜国立大学）
河西徹（横浜市立大学）
松浦晴美（関東学院大学）
古越奈央（相模女子大学）
吉田千登世（鶴見大学）
紅谷龍司（東海大学）

研修レポート 「新たな視聴覚サービスについて」

（平成30年3月8日実施）

平成30年3月8日（木）、海老名市立総合福祉会館において、ナクソス・ジャパン株式会社荻生哲郎氏、海老名市立中央図書館山本剛揮氏、片野巨斗氏をお招きし、新たな音楽サービスの一形態として、音楽データベース、ナクソス・ミュージック・ライブラリー（以下、NML）の概要説明及び海老名市立図書館での導入事例について、神奈川県図書館協会職員研修を行いました。

NMLはクラシックを中心とした音楽データサービスで、2005年から日本でのサービスを開始しています。800以上のレーベル（180万曲以上）の音源を配信し、公共図書館、大学図書館、小・中・高等学校等、約140機関で導入されています。

同時アクセスの上限数等に応じて年間利用料は異なりますが、CD50枚分のコストで約10万枚が利用可能になるなどのコスト削減やスペースの節約、受入・貸出・維持管理の簡略化などのメリットがあるようです。また、来館不要でのサービスの享受は、これからの時代に、図書館サービスを考える上で、大切な視点であると感じました。

海老名市立図書館においては2015年よりNMLを導入。従来から所蔵していたCD等についても提供を継続しています。書架や電子掲示板での告知だけでなく、クラシックの本の展示やiPad

を利用した講座等を実施し、ライトユーザーを増やす取り組みを行っているそうです。NMLの利用を促進するためには、案内だけでなく、ライトユーザーを対象とした試聴講座とヘビーユーザーを対象とした講座（NMLが講師を務めるクラシックの楽しみ方の案内講座など）を繰り返していくことが必要ということでした。

参加者からはNMLのサービスに関する質問や、実際に導入している中での課題や今後の展望等に関する質問が複数出ており、活発な意見交換も行われました。アンケートには「視聴覚サービスに限界を感じているので、新たなサービスに出合えて良かった」、「導入を考えたことがあったので、説明を直接聞けて良かった」、「詳しい導入事例が分かり参考になった」等の感想が寄せられました。

多くの公共図書館では視聴覚資料に関する課題を抱えており、今後のサービスをどのようにしていくのか、それを考える良い機会であったと考えています。

（鎌倉市大船図書館 水野 優子）

連載 わたしのイチオシ

横浜国立大学附属図書館 「YNU英語多読マラソンシステム」

英語多読マラソン推進への取組は、グローバル人材の育成が大学の喫緊の課題として認識される中、図書館として何かできることはないかと2017年度から始まったものです。取組の内容としては英語多読マラソン、洋書POP大賞、英語多読スタートアップガイダンスの3つになりますが、主軸となるのが英語多読マラソンです。

英語多読マラソンは、参加者が読んだ多読本の語数を蓄積し、一定の語数を達成するごとに賞品がもらえ、最終的には100万語達成を目指すというものです。英語多読マラソンの取組をしている大学はいくつもありますが、手帳のようなものに自分で記入したり、エクセルで管理したりするところが多い中、本学ではもともとは北海道大学附属図書館で導入したシステムに多少本学独自の改変を加えた多読マラソンシステムを導入しました。これにより参加者はクリックひとつで語数や読書記録を蓄積でき、他の参加者のレビューを読んだ

り、語数を競ったりすることができるため、英語多読学習を続けるモチベーションにもなります。参加者は昨年1年間で140名を超え、うち3名が100万語を達成することができました。100万語達成者にインタビューしたところ、3人とも英語力が上がったことを実感しており、うち一人はTOEIC満点をとるなど取組としての効果も目に見える形であらわれています。

洋書POP大賞や英語多読スタートアップガイダンスはそれぞれ多読というものを知らしめたり、多読をはじめのきっかけをつくるためのイベントとして機能しており、この三つ巴がうまく連動することで英語多読学習がますます活性化すると考えています。今後も英語多読を推進できるような新たな取り組みにチャレンジしていきたいと思えます。

(図書館情報課 森岡 緑)

英語多読マラソンシステム「ブックレビュー」画面

英語多読マラソンシステム「探す・記録する」画面